

FDニュース

発行日 2014年 2月 14日

1 全学FD委員会報告

目次：

全学FD委員会報告

1

レッスンシェア

2

H25年度前期授業アンケート集計結果について

4

1980年代に一部の高等教育研究者によって我が国に紹介されたファカルティ・ディベロップメント(FD)は、1999年に大学設置基準によって努力義務化され、2007年度より大学院、2008年度に大学において義務化された。そのため、2000年代前半から、国立大学を中心に各大学の教育改善等を企画・開発・推進・評価するための組織が相次いで誕生した。これらの組織はFD以外にも多様な役割を期待されているため、「高等教育開発センター」、「大学教育開発センター」等、名称は様々である。

また、「高等教育開発センター」、「大学教育開発センター」等、名称は様々である。

本学においても、FD活動を「教育研究上の目的」を実現させるための手段の一つとして位置づけ、全学的な教育の質向上を図ることを目的として、2008年4月に日本大学FD推進センターが設立された。FD活動の全学的推進と大学院・学部・短期大学部・通信教育におけるFD活動の支援を二本の支柱として掲げ、様々な活動を行っている。

しかしながら、各大学における組織の活動内容の広範さや多様さは、組織の性格と役割が曖昧なまま、課題とされる活動内容のみが膨張し続け、それを整理・検討する機関として位置づけられているのが現状である。そのため、学生指導に携わる側はFDの意義と役割を明確に把握できず、その内容も各教員のニーズに応じた実践的な内容でもなく、日常的な教育改善の努力を促進・支援するものには至っていない。さらに、昨今の大学を取巻く社会状況から、教育は大学にとって重要な活動であることの認識が高まって来たとはいえ、研究志向が強い日本の教員文化もFD活動の理解・浸透を妨げている一因となっている。

そこで、我々はFD推進組織を設置している全国の国公立大学を対象に2012年7月から8月にかけて「FD等教育開発推進関連組織に関する調査」及びその調査結果を踏まえたヒアリング調査を同年11月から12月にかけて行った。主な調査目的は、各大学におけるFDの目的、活動内容、効果を把握し、全学的なFD部局の設置状況と組織運営上の課題を探り、全学的活動と各学部での活動との連携の実態を調査することであった。

本調査は、日本大学全学FD委員会調査・研究ワーキング・グループの取り組みの一環として行われたため、本学総長名の公文書にて各大学へ調査依頼を行った。調査方法は、本学FD推進センターウェブサイトにて調査票を掲載し、回答には調査票をダウンロードして、回答データを電子メールにて本学担当事務局宛に送付する方法をとった。230大学へ依頼したところ、139大学から回答があった。調査結果の詳細は、『日本大学FD研究 第1号』日本大学FD推進センターに記されているが、結果の一部を下記に紹介する。

各大学が考えるFD諸活動の目的は、「各教員の教育力の向上・授業の改善」と「大学の教育力の充実」の二つの回答が全体の約9割を占めることがわかった。これらの目的に対して約8割の大学が、FD組織設置後に一定以上の効果を見出している事も分かった。さらに、データ集計からFD諸活動がスムーズに遂行されるためには大学の組織力が重要であり、各部署と協力しながらも、当該大学の教員がその組織のリーダー及び中心となって活動すべきであるというのが共通認識であることが確認できた。また、FD諸活動は、各大学が独自性を出すべきであり、それぞれの大学が協力及び情報を共有すべき性質のものではないのも共通認識であることを付け加えておきたい。今後は、大学を国公立別、地域別、あるいは、大学の在学生数といった規模の大きさの違いによって分析して比較検討することが課題といえる。そのため、クラスター分析等のマーケティングの手法を用いた分析方法で、本年度は『日本大学FD研究 第2号』に二本の論文を投稿予定である。様々な観点から各大学がFDをいかに位置づけているかを把握することにより、日本大学独自のFD推進の方向性を見出すヒントがあり、各学部・大学院において「教育研究上の目的」を策定するための手掛かりとなることが期待できる。



(文責: 雨宮 史卓)

2 レッスンシェア

今回のレッスンシェアでは、日本大学国際関係学部に新しく赴任されたJ.A.フライバーグ先生の「英語Ⅳ」、大西富士夫先生の「地域統合論」、本道慎吾先生の「スポーツ総合(バレー)」、駒美保先生の「数理の世界」の授業にお邪魔しました。
(インタビューアー:長嶺 宏作)



① J.A.フライバーグ助教

長嶺宏作:「英語Ⅳ」の授業は、スピーキングの力をつけることを目的とする授業ですが、今日の授業では学生の答えに対して間違っている、ネガティブな反応を示さなかったのが印象に残りました。

J.A.フライバーグ:それは私のバックグラウンドにも関係することですが、長い教育経験から「ポジティブ・リインフォースメント」を心がけています。

長嶺:失礼ながら、先生のバックグラウンドを知らないのですが、教えていただけますか？

フライバーグ:大学生から戻って説明しないといけないかもしれませんが、8年間英語講師として教えた後で、授業する力をより高度にする必要があると考えて、アメリカの大学院でTESOLを学びました。その後、コミュニティカレッジに付属する語学学校のディレクターを1年半近くやっていました。そこでは教育経験とともに学校経営の実際を学び、いい経験となりました。

長嶺:なるほど、そうした経験からすると日本大学国際関係学部の学生はどのような特徴があると感じますか？

フライバーグ:国際関係学部の学生の今まで受けてきた英語教育は、講義中心の授業だと感じます。私がプレゼンテーションやコミュニケーションが中心のアプローチで授業をしようとする、大変戸惑っていますね。でも、そのうちに慣れてきて、今まで6年間学習してきた英語の知識を応用できるようになっていると感じます。

長嶺:授業ではプレゼンテーションの課題を課していましたが、具体的にはどのようなものですか？

フライバーグ:プレゼンテーションの目的はコミュニケーションのスキルを高めることにあります。トピックについては自由に選ばせるのではなく、テキストにある題材を使っています。具体的には、レストランのメニューを作らせて、それについて発表するというものです。基本的なストラクチャーを、テキストを通じて示していますし、レストランのメニューのフレームワークも示すようにしています。

長嶺:ある程度の枠組みは提供するということですね。特定の単語や文法などの材料も指定しているんですか？

フライバーグ:私は文法や内容については特別には指示していません。昔、陶芸を習っていたのですが、その先生は私が作った作品を途中で手を入れて、素晴らしい作品に仕上げしてくれるのですが、それは私自身の作品ではありませんでした。なので、その教室は途中で行かなくなり、やめました。結局、学生自身から創造的に出たものではないと、モチベーションも上がりませんし、学生が考えなくなってしまいます。

長嶺:最後に、先生はどのような英語能力を伸ばしたいと考えているのですか？

フライバーグ:私は、単に英語が話せることでコミュニケーションができるとは思いません。様々な国の人とコミュニケーションするという際には語学だけでなく、文化や歴史などが重要です。英語の能力には、その人とコミュニケーションできるかということが問題であって、求められる能力は、多岐にわたり複雑です。この授業の学生は1年生です。たくさんを学ぶ必要がありますね。

② 大西富士夫助教

長嶺宏作:「地域統合論」の授業は、EUの地域統合を事例に、国際的な連帯や地域統合の実際を学ぶ授業でしたが、授業の導入では、先日のウクライナで発生した最大規模のデモのニュースから授業を始めていましたね。いつも時事ニュースからはじめるんですか？

大西富士夫:はい。学生が授業内容に頭を切り替えられるようにと思い、EUについての主だった動きや報道があれば、授業の冒頭で、それを紹介するようにしています。また、時事ニュースを取り上げることで、今学習していることが、現在の問題と繋がっているという意識を学生がもち、学習意欲も深まるのではないかと考えています。

長嶺:授業では、配布されたレジюмеとともにパワーポイントを使って説明していましたが、どのような意図があるんですか？

大西:授業では、レジюмеの解説が主となり、パワーポイント

をそれほど多用しているわけではありませんが、地図や組織図、複雑な概念の図等を示すために活用しています。

長嶺:本日の授業ではEUの具体的な政策の基礎となるEU法の説明でしたが、EUのHPを示して、原文を提示していましたが、これは学生が一時資料を調べたりすることができるように考えてですか？

大西:はい、そうです。授業では、その回に取り上げるテーマに関連するEUの公式HPを学生と共に閲覧し、見方や内容を解説しています。これは「現場感覚」を養うために行っていることです。私の研究手法のベースが、地域研究にありますので、何かを学ぶ際、実際に対象のある地域まで足を運び、自分の目で見て確かめることを大切にしています。もちろん、学生をEUのあるヨーロッパにつれていけませんが、EUは情報公開に力を入れており、HPは解かり易い作りになっているだけでなく、ポッドキャスト



等の映像資料も充実し、「現場感覚」を感じることができません。映像等を通して、EUに携わる人々や実際の会議の様子を垣間見る一助になればよいと思っています。条約や法令を原文でみることも、その一環です。

長嶺:私も教育行政学が専門なのですが、どうしても法律の説明は実態がわからなくなりがちなのですが、その点で今日の授業では、学ぶ意味として授業の全体像の中で、EU

③ 本道 慎吾 助教

長嶺宏作:今日は「スポーツ総合(バレー)」を見ましたが、学生は楽しそうでしたね。

本道 慎吾:専門科目としての体育ではないので、生涯スポーツにつなげるために、体を動かすということが楽しいと感じてもらわないと意味がないので、体を動かして楽しむということは心掛けています。

長嶺:私が大学生の時は、体力テストを最初にして、その後で球技をやるという形でしたが、大学の体育というのも随分、変わってきていますね。

本道:この授業は「スポーツ総合」という授業ですので、その選んだスポーツについて学び、楽しむという、これまでの学生たちが受けてきた体育とは少し違った授業であると考えています。

長嶺:今日の授業では、最初に2人1組になって、バレーボールでレシーブやトスを使ったキャッチボールした後で、同じ二人組でコートの端から端までボールを上げながら、センターネットを越えて、最後はバスケットゴールにボールを入れるというゲーム的な要素を入れたものでしたね。

本道:実際のゲームの場面を設定した練習を取り入れることでゲームを行う時に“できる”ことが多くなるので、ゲームがより楽しくなります。この課題には能力差が大きく出ますが、この授業で上手な子はゴールまで、そうでない子もネットを超えるまでと個々に課題を設定して取り組むことができます。

長嶺:体育の専門家としては、スキルの部分を教えたくなるものなんじゃないか？

本道:次の4時間目の授業はバレー経験者が多く、もう少し専門的な練習なども行っています。授業全体を見て常に少し難しい課題を与えて意欲が低下しないように心掛けています。

の地域統合が①不戦共同体の試みであること、②超国家主義と政府間主義という立場の間に対立があること、③民主主義の向上を目指す試みであることを理解することが重要だと提示されていました。そして、これらのことを具体的に理解するために、EUの政策過程(諸機関及び諸政策)の仕組みを学ぶ必要があるのだと述べていました。今日の授業は、具体的な政策の基盤としてのEU法ということで、授業の骨格が明確でしたね。

大西:これは、毎回の授業で心がけていることですが、学生にただ事実の羅列を丸暗記させるのではなく、授業全体の目的や授業の意義をしっかり理解してもらい、その目的のために各回の授業が構成されているということを知ってもらうため、5分程度の時間を使って丁寧に、ときにはくどいと思われつつも、説明するようにしています。「授業の主題や構造はシンプルに、各論は具体的かつ丁寧に」を心がけています。



長嶺:その後で時間を制限しての7人チームに分けての試合でしたが、興味深かったのは勝ったチームのメンバーはそのまま、負けたチームがメンバーを入れ替えるというのは、どういう意図があったのですか？

本道:おおよそチームのレベルは均等になるように設定しています。そのため勝ったチームと負けたチームに大きな差はないのですが、なぜ勝敗が付いたのかを学生が考えるようになるのが狙いです。

長嶺:全体を見ての感想ですが、やはり能力差というのはありますね。そのあたりはどうしているのですか？

本道:おっしゃるように座学と違い、目に見えてその能力差や意欲の差が授業中にあらわれてしまいます。運動が嫌いな学生はこれまでの体育で“できない”という経験が多く、自分は何にもできないと決めている感触があります。パスひとつとっても動作を分解し、できることを少しずつ課題として与え“できた”という喜びを少しでも感じられるように心掛けています。意欲に関してはできるようになってくると自ずと湧いてくる学生もいますが、そうでない学生もいます。その際は自分自身がゲーム等に積極的に介入していき、声をかけることで解決を図る場合もあります。

④ 駒美保助教

(インタビューアー:豊川 和治)

駒美保助教が担当する総合教育科目「数理の世界」は、1年～4年次までの50名の学生が受講している。国際関係学部のような文系科学部の数学の授業という、「苦手の数学をなんとか克服したい」という悲壮感が漂っているのではないかと予想(失礼)をしたが、予想に反して、一つの「セッション」が行われているような雰囲気に満ちていた。

授業は、最初10分間に「ウォームアップ」で最大200題の「割り算」に、一斉に取り組むことからスタートする。「回を重ねるごとにだんだん早くなり、頭の数学的な部分が活性化するのが自分で分かる」と学生達には好評である。

次いで授業は「作法」と「トピック」に分けられ、教員からレクチャーがある。「作法」では数学特有の決まりとなっていること、例えば、記号の使い方、何故 Σ や Π などのギリシャ文字が記号に使われるのか、丁寧な説明がなされる。「トピック」では、この授業でカバーすべき基本的な数学の各分野から1、2個トピックを選んで、考え方、表記方法、問題の解法などが、スクリーンで丁寧に説明される。

最後に、説明された「トピック」に関する問題を、各自が30分間取り組む。授業終了時に、この解答用紙の提出により学生の授業出席を記録するとともに、コメントや質問については、教師は丁寧に赤ペンで添削して、学生に好評とのことだった。



豊川和治:レクチャーと学生各自の演習が半々の授業にしているのは、どうしてですか？

駒美保:90分間、数学のレクチャーに集中するのは、学生にとって困難ではないでしょうか。自ら問題に取り組む時間を取ることで、より集中できると思います。それに、数学の力は結局演習を重ねることによってしか伸びませんから、この場で一問でも多く解いて力にしてもらいたいと思っています。

豊川:最初に「ウォーミングアップ」で割り算をするのは、どうしてですか？

駒:授業の試行錯誤の中から生まれた発想です。この割り算は、桁下がりと、余りを計算するというので、掛け算と加減算の全ての要素が含まれるよう、工夫しています。

豊川:解答用紙の添削が、大変好評のようですが。

駒:大手の受験教育会社の指導の経験から添削のノウハウを学ばせて頂いて、使っています。(笑)

3 H25年度前期授業アンケートの集計結果について

表1 国際関係学部授業アンケート科目別結果

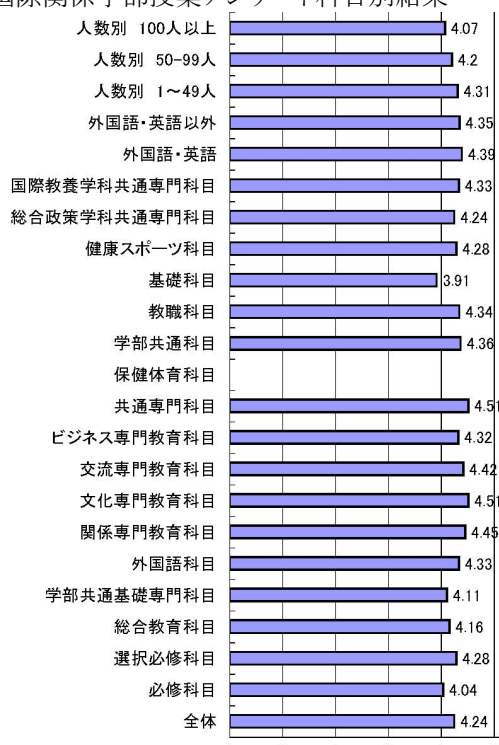
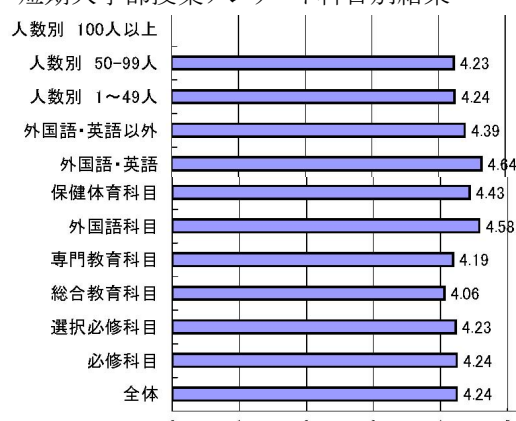


表2 短期大学部授業アンケート科目別結果



平成25年度前期の授業アンケートは表1・表2にある通りの結果となりました。詳細な結果については各授業担当者の個別の授業評価を参照し、授業改善に役立てていただければと思います。また、本年度の後期からSmartcatというシステムを導入し、試験的にアンケート入力Web化に取り組んでいます。ご意見などがあれば、FD委員会までお知らせください。(FD委員会)